

小学6年生 「u&i」を活用して多様な特性を認め合う人間関係を構築する

川崎市立新城小学校 教諭 北林 新菜 片岡 義順

【番組紹介】 u&i # 3 なんでも覚えられないの？

「u&i」は発達障害などの困難がある子どもたちの特性を知ることで、多様性への理解を深める。メインパートは、子どもと妖精の対話劇。困難のある友達の“ココロの声”に耳を傾けながら、その悩みや特性を知り、どうしていくのがいいかを考える力を身に付けていく。

【授業の概要】番組の視聴を通して、学級で大切にしたい価値（力）について考える。番組視聴とその後の主体的に話し合う活動を通して、多様な特性を持った友達がいることを理解し、協同して学級をよりよくしていこうとする態度を育む。そして、一人一人の意見を大切にしながら、学級目標の合意形成を目指していく。

【実践者による番組分析】

- 「ココロの電話」を媒介して困難がある子どもの特性に迫っているので、当事者の気持ちをじっくりと聞くことが出来る。対話形式ではないので聞いている側の反応が入らず、冷静に当事者の話を聞くことが出来る、聞き方のモデルとなっている
- 登場人物それぞれの気持ちを尊重している。キャラクターの提案に安易に同調するのではなく、自分で解決策を考えている点が良い。集団の利益にとらわれず「本人がどうしたいか」を大切にしている姿勢が大切にされている。
- 「がんばってもどうにもならないことがある」という言い回しによる、誤解が生じる可能性がある。児童が、努力によって解決できる事柄との区別が出来ているのか、子どもの実態に応じて適切に判断する必要がある。
- 発達障害やそれによる困難がある子の特性について、直接的に話したり指導をしたりすることがあまりない。番組を活用する際には、教師が明確に活用の意図をもって良い。

【授業の流れ】 6年 特別活動

題材名 6年2組学級目標をつくらう

学級活動(1)学級や学校における生活上の諸問題の解決

1. 本時で学級目標をつくることを確認する

◆4月の話し合いを振り返り、学級目標を考える材料の一つとして番組を見ることを伝える。

2. 番組視聴 u&i # 3

なんでも覚えられないの？

「アイくんがアクションシーンを多くしようといわなかったら、ユウくんはどうなっていたのだろう」※全体



3. 番組内アイの評価できる点について考える

「“アイくんすてきだな”と思ったところは、どのようなところですか」 ※各自 WS→全体

- ・いろいろなアイデアを出した。教えあった。
- ・アイ君自身の苦手を言えた。納得してあげた。
- ・せめないで理解した

◆アイくんの姿から「○○力」というキーワードで名前をつけていく※全体

「思考力」「理解力」「優力」「納得力」「助力」「認知力」「すなお力」「反応力」「思う力」「協力」「行動力」「告白力」「自分のかべをこえる力」

4. 学級で特に大切にしたいと思う力について考える

◆出された意見のどれもが大切なものであることを学級で共有。

◆今までの経験やこれまでの話し合いを想起し、自分なりの理由をもって学級目標として最も大切にしたい力の一つを選択。

◆各項目にネームプレート貼り、全体の傾向を視角化する。

◆次時に話し合いを行い、学級目標を完成させることを伝える。

<事後の活動>

本時の話し合いをもとにクラス目標を作り上げていく。



【授業の工夫点】

目的意識をもった番組の視聴

はじめに番組視聴の目的である『学級目標を作ること』を子どもに伝えた。番組視聴後の対話から、アイの行動やそれを裏付けている価値観（力）が、よりよい学級の姿につながったことを共有し、全員が学級目標を作っていくことに向かっているようにした。

板書で見える化

抽象的な意見や複数の要素が含まれる意見が出されることが想定された。教師と子どもや子ども同士の対話から、出された意見を板書で分類することで、その後の名前をつけていく活動に取り組みやすくなった。



多様な活動形態を取り入れる

学級全体での対話、各自思考（WS）、小集団活動と多様な活動形態を取り入れることで、一人一人が自分の意見を持ちそれを認め合うことができるようにすると共に、みんなで学級目標を作っていくという集団としてのまとまりを感じることができるようにした。

※学校放送番組の継続的な視聴

日常的な番組視聴の経験により、その時々で番組との適切な距離感を保つことができています。

【本実践の成果と課題】

○対話を通して考えを出し合い、共感し合う中で、学級をよりよくしていこうという視点を共有しながら学級目標を作り上げることができた。

○番組視聴とその後の話し合いを通して、クラスで多様な考え方や特性を持った友達と過ごしていく上で、これまでの生活経験で学んできた「思いやる気持ち」だけでなく、相手を理解すること気持ちや行動することの価値についての実感につながった。

●本実践を通して、他者理解に対しての深まりを子供の発言、ワークシートの記述、事後の授業から担任として実感した。客観的な視点からの裏づけも欲しい。